

## 「メンデル家12人兄弟館の書」について(1)

坂本信太郎

### 1. はじめに

本稿は西ドイツ・ニュルンベルク市・市立図書館古文書部 (Stadtbibliothek Nürnberg, Deutschland) 所蔵の手書本「メンデル家12人兄弟館の書」(Das Hausbuch der Mendelschen Zwölfbrüder stiftung zu Nürnberg) 並びに「ランダウア家12人兄弟館の書」(Das Hausbuch der Landauer Zwölfbrüder stiftung zu Nürnberg) に関する報告の第一部である。

これらの本は14世紀以来のニュルンベルク市に実在していた凡そ300種に亘る職種の1,000人以上の職人一人一人の肖像画を、それぞれの仕事場・道具とともに写生させたもので編成されているのである。そしてそれぞれの職人の簡単な経歴、死亡年月日、姓名、職種、入所番号を附記してあるもので、言わば館(養老院)の登録原簿とでも言うべきものである。古代・中世の技術史研究にとって、文献資料、特に多くの情報を与えてくれる当時の状況をそのままに写した絵図の欠如は隘路となっている。従ってこれら多数の手書きの絵図は非常に貴重な存在である。しかしながら我が国に於ては、これらの絵図に関する知識・情報は極めて僅少であった。1954~58年に Charles Singer など4名の編者により、Oxford の Clarendon 社から発刊された大著「A History of Technology」の5巻本中の第2巻、第3巻に、僅かにその中の9葉が挿し絵

として引用掲載されているのを見るにすぎない。<sup>(1)</sup>

「12人兄弟館の書」並びに「職人肖像画」に就いての最初の論及は、一橋大学の阿部謹也教授によってなされた。昭和56年3月・朝日新聞社刊行の「中世の窓から」<sup>(2)</sup>の中で、氏は社会史、民衆生活史研究の立場から、その内容と意義を広く述べられた。<sup>(3)</sup>

私は昭和57年度の早稲田大学在外研究に際し、ニュルンベルク市、市立図書館古文書部に於て、幸いにもこの肖像画一枚一枚を具さに調査することが出来、更にその綵てをカラースライドにして持ち帰ることを許された。<sup>(4)</sup> 目下鋭意整理研究中で、順次発表してゆくつもりである。

メンデル家の「12人兄弟館の書」は3巻から成っている。第1巻(M-Bd. I, Amb.<sup>(5)</sup> 317.2°)は3部(1Nr, 2Nr, 3Nr)で構成され、335葉の肖像画を含んでいる。第2巻(M-Bd. II, Amb. 317 b.2°)は4部で520葉。第3巻(M-Bd. III, Amb. 318.2°)は1部、13葉である。ランダウア家のものは2巻(L-Bd. I, Amb. 279.2°; L-Bd. II, Amb. 279 b.2°)425葉である。1枚毎の肖像図の上部に記してある経歴は、その時々幾人かの書記の手によるもので、それぞれ極めて特徴のある書体で書かれているので、その解読は中々容易ではない。しかし幸いなことにメンデル家の書については、1953年 Karl Fischer によって経歴部分に基づいて製作された索引(Amb. 1120.4°)<sup>(6)</sup>があり、更に第1巻については解説篇と図版篇の2冊が出版されている。<sup>(7)</sup> これは1965年に Prof. W. Treue をはじめとする8名の編集者により、ミュンヘンの Bruckmann から出されたものである。しかし同書第2巻以下については出版はなく、亦ランダウア家の書については解読も未着手の状態である。

今回は、メンデル家の書の第1巻の前半部についての報告を記す。

注(1) *A History of Technology*, Vols. 1-V., Edited by Charles Singer, E. J. Holmyard, A. R. Hall and Trevor I. Williams, Oxford at the Clarendon Press.

昭和37～9年、「技術の歴史」平田寛編訳全10巻、筑摩書房、邦訳本第3巻“地中海文明と中世・上”に3葉、第4巻“地中海文明と中世・下”に5葉、第5巻“ルネサンスから産業革命・上”に1葉が見られる。

(2) 本書は昭和55年2月18日から朝日新聞夕刊紙上に100回に亘り連載したものに加筆出版したものである。

(3) 私が昭和57年度の早稲田大学在外研究に際し研究地をニュルンベルク市に定め、研究課題を「12人兄弟館の職人図」に集中させるに至ったのも「中世の窓から」からの教導によるところが大きかった。ここに記して感謝の意を表する次第である。

(4) 「12人兄弟館の職人図」をニュルンベルク市・市立図書館古文書部に見出す迄の経過については、既にその概要を早稲田大学広報、昭和58年6月22日（水）発行、号外第1219号・在外研究等経過報告-211に記した。

メンデル及びランダウア家の書の全部についてスライド撮影の許可を与えて下さったニュルンベルク市図書館当局、そして全面的な援助を下さった早稲田大学の各方面の方々へに深甚なる感謝を述べると同時に、この際にお世話になったニュルンベルク市在住の芸術家加藤氏御夫妻、古文書部部長 Dr. Hirschmann, 主任研究員 Dr. Thomann, 及び古文書室係長 Frau Beare, 館員 Herr Hofmann の方々に感謝を申し上げたい。

(5) ニュルンベルク市図書館の文献部文書記号である。

(6) Karl Fischer, Register zu den Mendelschen Zwölfbrüder Büchern der Stadtbibliothek Nürnberg-Amb. 317 a, b 2° und Amb. 318 Anhang; Berufs-Register zu den Landauer-Brüderbüchern-Stadtbibl. Nürnberg. Amb. 279. 2°, 279 b. 2°.

(7) Das Hausbuch der Mendelschen Zwölfbrüder-Stiftung zu Nürnberg. Deutsche Handwerkerbilder des 15. und 16. Jahrhunderts. Herausgegeben von Wilhelm Treue, Karlheinz Goldmann, Rudolf Kellermann, Friedrich Klemm, Karin Schneider, Wolfgang von Stromer, Adolf Wißner, Heinz Zirnbauer. Bruckmann München.

Textband. (p. 156.)

Bildband. (p. 275.)

## 2. 「メンデル家12人兄弟館」と「職人肖像画」

部厚い城壁にとり囲まれているニュルンベルク市は、南北に走るケーニッヒ通りと東西に流れるペグニッツ川で四分されている。ペグニッツ川とケーニッ

ヒ通りは、市の中心であるムゼウム橋で交差している。ケーニッヒ通りの北端には小高い丘陵に聳え立つ王城がある。そして順次南に下って市役所、ゼバルダス教会がある。この教会には市の守護神である聖ゼバルダスが祀られている。次いで中央広場 (Hauptmarkt)、ローレンツ教会を経てケーニッヒ市門に至る。そこには非常に高く大きい円筒形のフラウエン塔がある。フラウエン塔から城壁に沿って西方へ500mほど進むとカルトイゼル横丁 (kartäusergasse) に出る。そしてその200m北にコルンマルクト広場 (Kornmarkt) がある。この一画は市の西南部で、商店や人出の賑やかな中央街に比べると閑静な場所である。

このコルンマルクト広場に面した南側、カルトイゼル横丁の西側の角地に、石造三階建の「12人兄弟館」が1388年のヴァルブルギス (Walburgis) の日に

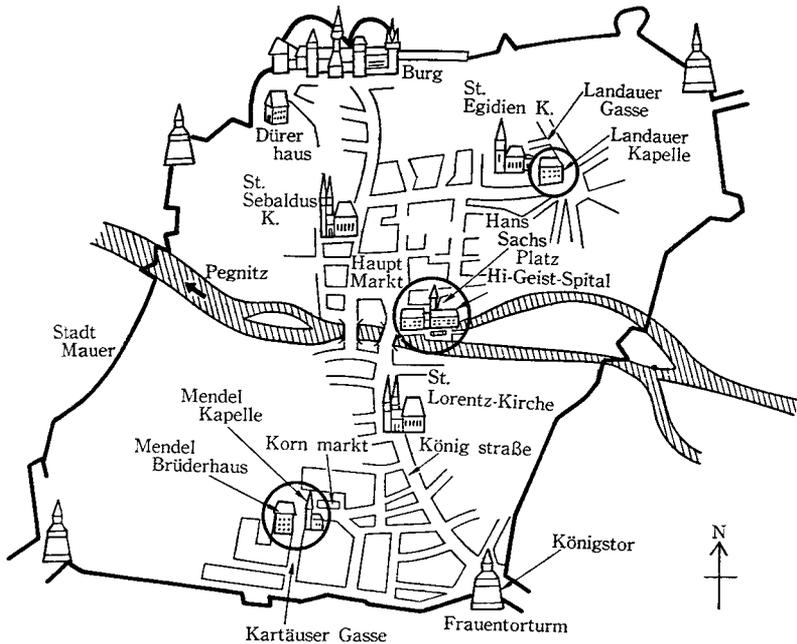


Fig. 1. Nürnberg Altstadtplan

完成した。<sup>(1)</sup> この館はニュルンベルク市で働いていた年老いた身寄りのない、病身の、そして経歴上問題のない手工業職人のための慈善収容施設として、当市の大商人コンラッド・メンデル (Konrad Mendel) が設立した養老院なのである。間口は 16.31m (53.11 Stadtschuh : 当市制定の尺), 奥行き 11.46m (37.4 Stadtschuh) で、地下室があり、更にカルトイゼル横丁を隔てた東隣に専属の小教会堂があった。一階には個室が12室あり、他の階には食堂、台所、貯蔵庫、物置きがあった。

収容者数は12人で、収容者が1人欠けると1人、2人欠けると2人を補充し入所させるというような方式で、常に12人に保たれた。これによって「12人兄弟館」(Zwölfbrüderstiftung) と呼ばれる。この12という数は、キリストの12使徒にちなんだものであるとされている。この館は1397年市に寄贈された。しかしその管理・運営は引き続きメンデル家の者が代々管理人となってこれに当たった。1388年以来1799年迄の間に収容した老職人の数は799人にもなった。



Fig. 2. メンデルの兄弟館 (右) と小教会堂 (左)

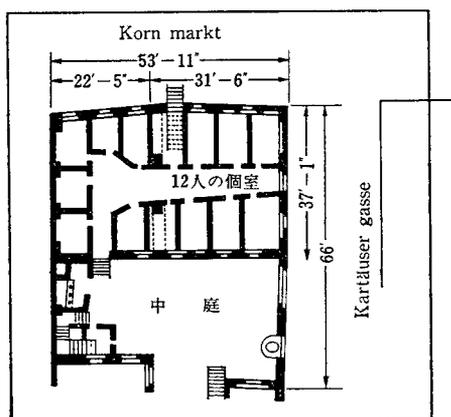


Fig. 3. 12人兄弟館一階平面図

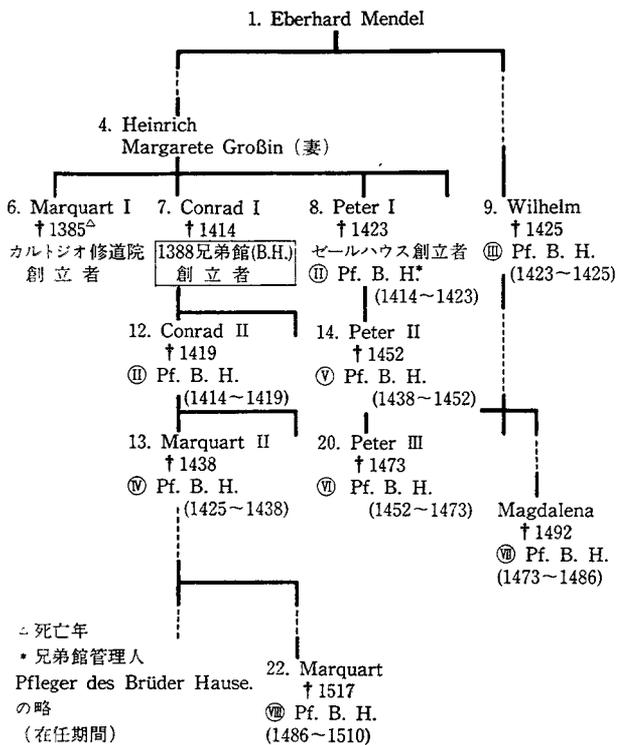


Fig. 4. Pf. B. H. を中心としたメンデル家系図

コンラッド・メンデルに見られるような、豊かな大商人達の慈善的事業への寄進行為は、中世都市に於て決して珍しいものではなかった。14世紀後半からニュルンベルクには、多彩な商品が溢れ、商業、手工業は目覚ましい発展を遂げ、南ドイツきっての富裕な都市になった。大商人や企業家をあまた輩出していった。商人達は自信をもって一層富の蓄積に励んだ。しかし励みつつも、反面、自分達の商行為が聖書の「富める者の天国の門に入るは、ラクダの針の穴を通るより難からん」という神の言葉にていしょくすることにおののきを抱いていた。その恐怖から脱し、死後の救済を確実なものとするため、商行為の償いとして、教会堂建設のような敬神的事業、或いは養老院などの慈善施設へ

の喜捨、寄進が行なわれた。1331年、コンラッド・グロス<sup>(2)</sup> (Konrad Groß) が当市の施療施設、聖霊病院 (Heilig-Geist-Spital) を寄贈したのも、亦1510年マトイス・ランダウア (Matthaeus Landauer) が、コンラッド・メンデルに倣って老職人のための養老院であるランダウアの「12人兄弟館」<sup>(3)</sup> と小教会堂を創立したのも、この内心の呼びかけ (宗教的背理感の補償) に導かれてのことであつたらう。こうした例<sup>(4)</sup> は尚数多く見ることができる。

1807年3月27日、ニュルンベルク市が都市政策の所管事業として社会福祉をとりあげた時、一個人の寄進に基づく福祉事業であつた「12人兄弟館」の使命は終つた。そして同年10月1日に聖霊病院「Hi. Geist-Spital) の中に統合された。その後は一般養老院として今日にいたっている。

注(1) 現在、この施設は市の中心部にある聖霊病院の構内に移されて、この地点には存在しない。

小教会堂 (Kapelle) のあつた場所には国立ゲルマン博物館が、そして兄弟館 (Brüderhaus) の跡には商店、事務所が建っている。

(2) 聖霊病院は当市の中心にあるムゼウム橋の東側、ベグニッツ川の北岸にある。

また、Konrad Groß は Konrad mendel の外祖父である。

(3) ランダウアは熔鋳炉をもつた冶金企業家である。ランダウア家の「12人兄弟館」は当市の北東部に在る St. Egidien 教会の東隣り、ランダウア横丁に面した場所にあつた。現在は Willstätter Gymnasium が建っている。その一隅に Landauer Kapelle (小教会) が現存している。

(4) 1380年、Marquart Mendel I はカルトジオ修道院 (Kartäuser Kloster) を、Peter Mendel I は1392年に Seelhouse=Beginenhouse=ベギン女子修道院を創設している。(ベギン修道院は12世紀にオランダに起り、13世紀から14世紀にかけてオランダ、フランス、ドイツに流行した半俗的な宗教団である)

1429年 Ingolstadt で救貧院が、1496年 Salzburg で兄弟館 (B. H.) が、また1451年 Regensburg でも兄弟館 (B. H.) ……が寄贈されている。

1425年、マルクアルト・メンデル2世 (Marquart. II) が「兄弟館」(Brüderhouse) 四代目の管理人に就任した。そして1438年に死去する迄その任に

あった。その間に入所者一人一人の肖像画を画家に描かせ、それに簡単に経歴を附して冊子を作るといふ新しいことを行つた。これが「館の書」(Hausbuch)で、彼によって製作が開始されたのである。しかしこの書が何時から始められたのかははっきりしていない。メンデル慈善財団の組織創設が1425年であること、並びにこの書に使用されている用紙が G. Piccard によると、1425年から1429年の間に Fabriano<sup>1)</sup> で製られたものであろうということなどから、恐らくマルクアルト在任中の終りの時期であつたのではないかとされている。

前記のように 799 人の職人図を取めた本書は、1844年メンデル慈善財団からニュルンベルク市図書館にそのままの形で寄贈された。その為、あちこち人手に渡ることなく、1点の欠除もなくきちんとした完全な形で残ることが出来たのである。これは誠に幸いなことであつた。これに比べて、マトイス・ランダウアの「12人兄弟館の書」は種々の経過を経て後やつと市図書館に収めることが出来たので、図の順序等に可成りの乱れが見られる。

「館の書」に描かれている画像には、各々の職人が当市で営んでいる職業動作が写實的に描写されて居り、その上その道具、装置、素朴な機械、仕事の経過、資材などがほぼ正確に描かれている。しかもその職種は極めて広い範囲にわたっている。従つて中世後期から近世初期にかけての 100 年間にわたる手工業の全貌をここに明らかに見ることが出来るのである。

手工業並びに技術についての記録や文書は、その絵図は勿論のこと極めて僅少である。我々が見ることが出来る絵図といへば、古代のものではエジプトの墳墓に見られる壁画やパピルスに描かれたもの、或いはギリシヤの壺絵、皿絵にてあり、中世のものでは、9世紀のユトレヒトや14世紀のラットレルの「詩篇」、農事暦の挿絵、亦ミニアチュアやゴブラン織の壁掛け中、或いは12世紀のモンレアレ大聖堂や13世紀のサン・マルコの大聖堂のモザイクに、シャルトル大聖堂の13世紀初めのステンドグラス、13世紀のフィレンツェ本寺の鐘塔浮彫などの教会建造物中に散見する程度である。そして何れの場合も描かれて

いる職人や技術の扱いは、一添景としての範囲を出てはいない。

ゲオルグ・アグリコラ (Georg Agricola, 1495~1555) の「デ・レ・メタリカ」(De Re Metallica, 1556) やヨースト・アマン (Jost Ammann, 1539~91) の木版画集「身分と手職の本」(Stände und Handwerker, 1568) のような、仕事をしている職人や技術そのものを主題として描き、系統的に集めた有益な図解の書物が次々と現われ始めるのは、やっと16世紀に入ってからである。そしてメンデル家の「館の書」がこれらの図の嚆矢を為していたことは疑いないことである。その影響は、これを手本としたランダウア家の「館の書」については言うまでもないことだが、アマンの木版画にも亦其他の図にも、構図のとり方などにも明らかに感ずることが出来る。

ところでランダウア家の「館の書」は、アマンの書やアグリコラの書のように、職種の内容を示すために職人を描き、技術の方法を知らせることを目的として描かれたのではなかった。もっぱら入所者についての登録原簿を製作することにあつた。入所者の職業を正確にそのまま写し出し、一見して入所者の経歴と生涯が直ちに誰にでも分るように描かれたものなのである。そしてこのことが結果として企てずしてこの書を技術についての貴重な書に仕立て上げることになった。

描かれている 300 種に近い職種を見ると次の二つの事に気付く。一つは当時のニュルンベルク市の手工業は非常に細分化され専門化されていたことである。次ぎには、例えば、飛脚 (Boten), 鐘楼守 (Türmer), 捕吏 (Büttel), 税吏 (Zöllner), 馭者 (Fuhrmann) ……のような、今日の我々から見て到底職人の範疇に入らないようなものが可成り含まれている点である。しかしながらこれらの職業も当時は間違いなく手工業者としての権利を持っていたのである。同様の事は我が国の職人の変遷の中にも見られる。中世荘園領主の支配機構の一部である<sup>しき</sup>職に属した<sup>しきにん</sup>職人があり、手工業者はその下級職人として組み入れられていた。<sup>みちみち</sup>② そして「道々のもの」或いは「道々工」,<sup>だくみ</sup>「道々細工」と呼ばれて

おり、その中には、大工、細工並びに木道者<sup>ぎのみちもの</sup>、絵師、仏師、陰陽師、楽人、商人、更に博打<sup>くぐつ</sup>、傀儡、雑魚売、相撲などが含まれてた。16世紀末になって職<sup>しぎ</sup>の一部の下級職人であった手工業者だけが分離され改めて職人<sup>しよくじん</sup>と呼ばれるようになったのである。職人概念の確立の一面が東西軌を一にしている様が覗いて誠に興味あることと言えよう。

尚メンデルの「館の書」並びにランダウアの書もともに、その内容から言って、唯単に技術史研究のためのみならず、社会史研究、民衆生活史、風俗史研究などにとっても第一級の資料であると言える。メンデル家本の第一巻が市図書館によって公開されると、各方面の専門家に非常に大きな関心を惹き起したのは当然の事であった。しかし同時に、その利用のたびにこの貴重な本に新しい毀損が発生し、永久保存のための早急な保護対策を講ぜねばならなくなった。元来この本は「兄弟館」の事務用帳簿の一つとして作製されたものであって、決して美術品として作られたものではなかった。従って館の奥深く秘蔵されるようなものではなく、日常的な記録簿に過ぎず、極めて気軽な粗略な扱いを受けて来た。<sup>3)</sup> その上この本は 450 年も経っているので用紙も画面も極端に脆くて痛みやすい状態にあったのである。そこでトラウエ教授 (Prof. W. Treue) の



Fig. 5. メンデル本、第一巻の図例

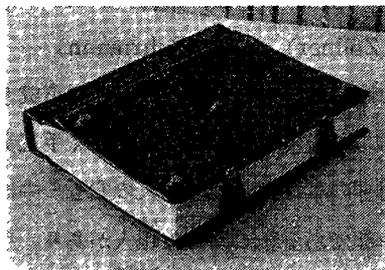


Fig. 6 メンデル本、第一巻の外観

下、市図書館修復員のマイル（Herr Heinrich Maier）によって全部について1枚ずつの復元，補習作業が行われた。現在がっちりした真鍮の尾錠を付けた立派な皮で装丁され，その上一巻毎に箱に入れられて，図書館古文書部（Stadt-bibliothek Archiv Nürnberg）に保管されている。本の大きさは巻・号により異なるが大体のところ 23cm×36cm で，絵の用紙については 18cm×24cm 位のものである。

注(1) 105年（後漢時代）中国で発明された製紙法が，ヨーロッパに始めて伝わったのは，1150年スペインであった。そして13世紀のイタリアに及び，アンユナ侯国のファブリアーノ（Fabriano）にイタリア最初の製紙工場が出来た。1276年である。ここの製品は非常にすぐれたもので，上質紙としてヨーロッパにひろまった。すかし模様の技術もあったという。ドイツでは1336年，ニュルンベルクに製紙工場が出来た。

(2) 職人尽絵，石田尚豊編“職人の変遷”19～20頁，日本の美術5，第132号，至文堂，昭和52年。

(3) 婦人の肖像画の顔に墨でひげをいたずら書きしたり，人物批判を後から書き加えたりしているのが見られる。

### 3 メンデル家「兄弟館の書」

メンデル家の「兄弟館の書」第一巻の肖像画についてその経歴と若干の説明を記すことにする。尚枚数の都合上今回は 1Nr の前半のみとする。亦肖像画もその全部を掲載することは残念ながら出来ないことをお詫びする次第である。本書第一巻は Fig. 5, 6 に見るような装丁で，25cm×31cm の大きさである。やや厚手の台紙（21cm×31cm）に，縁から 1cm 程度離して，19cm×28cm の大きさの画面が一枚一枚，綴じ込み側の辺の部分で貼付してある。画面の用紙は木炭紙と思える手すきの紙で，表面を薄くニカワで塗布してあるように見える。絵は輪郭を羽根ペンで墨で描き，水彩をほどこしてある。この絵の具は，褪色も変色も少ないこと，水に濡れて一部分が薄くなっている絵があること，及び強く圧されて他の絵の部分が転写されている点などから見て顔料絵具であ

ったと思われる。

肖像画には 1953 年 Karl Fischer が製作した索引の番号が附してある。例えば 32 と書いてあれば番号 32 番のおもて頁の図であることを示し、32v. は番号 32 番のうら頁の図という意味である。入所者の入所番号とは一致していない。上掲 32v. のについて言えば、メンデル家本第一巻の場合なら、70 番目に入所した兄弟 (70Br.) である。今後例えばメンデル家本、第一巻、第一部、索引番号 32v, 70 番目の兄弟を M-Bd. I, 1 Nr, 32v, 70Br. のように簡略して記す場合もある。

絵は何人かの無名の画家が次々と引き継いで書いている。従って画家により、亦時代時代の絵の流行によって、画法や背景の描き方などに違いが見られて興味深いものがある。「館の書」は元来は画家が本人を見て描くものであるのだが、M-Bd. I の 1 (5.Br.) から 60v (125. Br.) までの絵は、その当人について残されていた記録を基にして、想像的に描いたものである。しかも一人の画家の手によっているので、画像の顔は皆同一になっている。尚入所者についての簡単な経歴は、画家の手ではなく書記によって書かれている。

---

### メンデル家「館の書」

#### 第 1 巻 其の 1 1388~1436年

メンデル家「兄弟館」の創立者で、1388年から1414年迄の初代管理人であったコンラッド・メンデル (1414年死亡) 氏の肖像画は欠落している。

1. <sup>こびき</sup>木挽, Hans と呼ぶ, 5. Br., (1425~36年の間に描かれたものである)  
2 台の木挽台に掛け渡した板の上に裸足で立ち、両手握りののこぎりを使用している。
- 1v. 靴屋, Reinhard (名前は Verstümmelt か), 6. Br., (1425~36年の



Fig. 7. 木挽

(Amb. 317. 2°, Bd I, 1 Stadtbibliothek Nbg.)



Fig. 8. 靴屋

(Amb. 317. 2°, Bd I, 1v)

作画)

突錐を持って作業中で、仕事机の上には半月形の裁断包丁と、裁断した靴底、<sup>(1)</sup> 材料革がある。そして床には裁断鋏、壁には靴木型が見られる。仕事部屋の奥の窓は、雨戸が上下に二つに開くようになって居り、下に開いた部分は同時に商品陳列台になっている。張り枠の入った靴が一足置かれている。亦雨戸を引き上げる仕掛けが見られる。

2. 荷担人夫, Cunrad と呼ぶ, 9. Br., 9 番目の死亡者, (1425~36年の作画)

袋担ぎ人は、袋一杯の荷を二重にまわした縄でしっかりと担ぎ運んでいる。アーチ形の玄関の上方には見張り用の覗窓がある。

2v. モルタルこね, Fritz と呼ぶ, 10Br., 10番目の死亡者, (1425~36年の作画)

支え板で堰止められているモルタルを、捏鉄で捏ねている。傍に取手のある水桶が置かれている。モルタルは石灰と砂に水を注いで造られる。

3. パン屋, Zenner と呼ぶ, 11Br., 11番目の死亡者, (1425~36年の作画)

円形やとがった細長い白パンをのせた木製のシャベルをドーム形窯にサッとくり出している。



Fig. 9. パン屋  
(Amb. 317.2°, Bd I, 3)

3v. ぶどう栽培人, Hans Ledrer と呼ぶ, 12 Br., 12番目の死亡者, (1425~36年の作画)

ゆったりした養老院の服を着て、灰色のフェルト帽を被る。鎌形の小刀でぶどうの剪定をしている。ぶどう園は編垣で囲われている。

4. 石工, Cunrad と呼ぶ, 13 Br., 13番目の死亡者, (1425~36年の作画)

中庭で一本足の椅子に座して、つるはしを以て細工している。定規, 水準器,



Fig. 10. 石工  
(Amb. 317.2°, Bd I, 4)



Fig. 11. 織工  
(Amb. 317.2°, Bd I, 4v)

切妻形の型板<sup>2)</sup>が見られる。15世紀後半及び16世紀初期には、細工用つるはしは徐々に、たがね状の鉄製の削り具と木槌の採用に代ってゆく。

4v. 織工, Hans Weber と呼ぶ, 14Br., 14番目の死亡者, (1425~36年の作画)

織工は粗削りの丸太で組み立てられている織機に座し、裸足で踏木を踏んでいる。踏木は天井に吊した棒の滑車で連結されている綜絢を上下させて、梭口を開く。右手でその開口部に梭を投げ込み、左手でオサを操作する。仕事部屋の左隅には巻いた糸が入れた箱がある。踏木附織機(ペダル式織機)は13世紀になって初めて出現した。13世紀のCambridgの手写本にその絵がある。亦14世紀半ばのコンスタンツのフレスコ画、フィレンツェの浮彫の中にも見られる。

5. 検量係員, 秤屋の Cuncz と呼ぶ, 15 Br., 15番目の死亡者, (1425~36

年の作画)

検量係員が大きな天秤の左手の皿に商品の包み、右手に半球体の把手環のついた石の錘りに乗せ、両手で静止させている。検量係員は市の税関所において、梱包を計量、値踏みをするのである。14世紀末ニュルンベルク市の付近には24の税関があり、そのうち10ヶ所は市の入口にあったという。ニュルンベルク市、Winkler-Straßeにあった旧市検量所のアダム・クラフト (Adam Kraft, 1460~1508) 作の浮彫り (現在は国立ゲルマン博物館にある) と比較して見ると面白い。

5v. 指貫き作り、指貫き屋と呼ばれる、16 Br. 16番目の死亡者、(1425~36年の作画)

金床のような物を前に座して、既に小さくポンチ (目打ち) してある指頭金物を弓ぎり (弓) で、細いくぼみ、広いくぼみさまざまに加工している。時には金、銀



Fig. 12. 検量係員  
(Amb. 317.2°, BdI, 5)



Fig. 13. 指貫き作り  
(Amb. 317.2°, BdI, 5v)

を用いることもあるが普通は銅、鉄、真鍮を材料とし、铸造或いは薄板を叩いて作る。指頭に帽字の様にびったりはめて用いるのである。(ヨースト・アマンにも同様な図がある)

6. 鐘楼守, Peter と呼ぶ, 17Br., 17番目の死亡者, (1425~36年の作画)

ぎざぎざした形の支え壁のついた多角形の塔, 塔頂には鐘が下がっている。右手には弓形の窓とゴシック様式の曲線装飾のしきりを持った窓のある内陣が見える。丸筒瓦の屋根には十字架が見える。鐘楼守はチューバを吹き鳴らしているが火事を発見したのだろう。塔守は火事を発見したら, 角笛の合図で警報を出し, 鐘を鳴らして市民に知らせることになっていた。

6v. 毛羽立て工, Peter Verber と呼ぶ, 18Br., 18番目の死亡者, (1425~36年の作画)

天井に吊るした棒を通して, ランヤ布地が細長い床机の上に二重に垂れさがっている。職人は織物の表面を両手を使って毛羽立てている。毛羽立て用具は,



Fig. 14. 毛羽立て工  
(Amb. 317.2°, Bd I, 6v)

アザミヤオニナベナ<sup>(3)</sup>の頂部を、取手のついた軽い木の枠にしっかりとめたものである。これはラシヤの繊維の先を表面におこして一層柔かに仕上げるための作業である。粗い新しいオニナベナのあとで、もっと柔かな使い古しのものを使って布地を何回もおこすと更に柔かな布地に仕上げる事が出来る。オニナベナはヨーロッパ、南イングランドで栽培されていた。この工程の初期の絵画がポンペイの壁画に見られる。

7. 毛皮衣料製造者, Albrecht と呼ぶ, 19Br., 19番目の死亡者, (1425~36年の作画)

背もたれのある腰掛けに座して、リスの毛皮を縫い合わせている。一緒に裏地も縫っている。壁につけた2ケの留め環に、毛皮が拡げられ、錘りをつけて吊り下げられている。

7v. 甲冑磨き工, Gorg と呼ぶ, 20Br., 20番目の死亡者, (1425~36年の作画)

低い仕事台の上に、甲冑の一部が木釘でしっかりと据へつけられている。



Fig. 15. 甲冑磨き工  
(Amb. 317.2°, Bd I, 7v)

革がうちつけてある木片の磨き棒で、ベンガラを研磨材にしてびかびかに磨き立てている。傍の机には、濡らし用の水の入った壺と、鉄製青、馬上槍試合用手袋が置いてある。亦床上に研磨棒とベンガラの入った袋がある。

8. 農夫, Rynolt と呼ぶ, 21 Br., 21番目の死亡者, (1425~36年の作画)

重たい有輪犁の二本の柄を操って農夫が耕している。この犁は垂直刃と水平刃の犁べらを持ち、犁べらできった土壌をひっくり返す為の犁板を具えている。11世紀から12世紀にかけてこのような犁の絵が見られるようになる。より簡単な型式の犁は既に紀元前ゲルマン民族によって作られている。

8v. 庭師, Berchtold と呼ぶ, 22 Br., 22番目の死亡者, (1425~36年の作画)

野獣を防ぐための柳の枝で編んだ垣根の中の庭地で、庭師は開墾用鍬をもって働いている。腰には枝切り用鉋を挿している。絵に見られるように庭地は三部分に分けられている。

9. 蹄鉄鍛冶屋, Andres と呼ぶ, 23Br., 23番目の死亡者, (1425~36年の作画)

右下半分が欠如している。

9v. 薪割り, 盲の Cunrad と呼ぶ, 24Br., 24番目の死亡者, (1425~36年の作画)

左下半分が欠如している。

10. 鎖帷子くさりかたびら作り, Heintz と呼ぶ, 25Br., 25番目の死亡者, (1425~36年の作画)

鎖帷子は鉄の環を互いに連結して作られる。環は針金を曲げて鍛接するか、亦は細長い鉄板を鍛接もしくはわ鋌留めにして製造される。図では平たい鉄板の環(直径約1cm)をヤットコで鋌留めになっている。1565年代、若い職人は半年間働いて鎖帷子をマイスター作品として提出することを許されていた。鎖帷子の発明者はガリアのケルト族だと言われている。鎖帷子は当初単独の鎧とし



Fig. 16. 鎖帷子作り  
(Amb. 317.2°, Bd I, 10)

て使用されていたが、鉄板造りの鎧が生れてからは、鎧下着の地位に後退した。ニュルンベルク市で非常に盛んな産業であった。しかし15世紀の終り頃には鉄板鎧に完全に取り替られ衰亡してしまった。そして職人達は次第に針金細工師に変わっていった。

10v. 車大工, Wagendreyn\* と呼ぶ, 26Br., 26番目の死亡者, (1425~36年の作画)

養老院の服装の上に前かけを掛けた車大工が、2台の支え台に支えられているスポークのある車の外縁を手斧で削っている。車大工は車のみでなく、犁、そり、輪、馬鍬なども製作する。

\* 職業から作られた姓である。dreyn=drehen.

11. 仕立屋, Lienhard と呼ぶ, 27Br., 27番目の死亡者, (1425~36年の作画)

頭巾を深くかぶり、養老院の服を着た仕立屋が膝にコートのをせ、鋏で作業をしている。壁に沿った衣装掛けの棒には完成した服が打ちかけてあり、其の他にもハンガーに懸けたのが下げてある。

11v. 桶屋, Niclas Pütner と呼ぶ, 28Br., 28番目の死亡者, (1425~36年の作画)

桶屋が木製の桶のたがを当てたがねと木槌で打ち締めている。木のたがの桶はケルト人にさかのぼることが出来る。取っ手が2ケある手桶とたばねたたがが床上に置かれている。

12. 針金製造人, Gorg と呼ぶ, 29Br., 29番目の死亡者, (1425~36年の作画)

作業台の上の2ケの回転子を両手で操作している。この図では回転子の間にあるべき引き抜き板(ダイス)が画かれていない。



Fig. 17. 桶屋  
(Amb. 317.2°, Bd I, 11v)



Fig. 18. 針金製造人  
(Amb. 317.2°, Bd I, 12)

針金は10世紀になって引き抜き用鉄板（ダイス）が発明されるまでは叩きのばして製造していた。

12v. 短剣作り, Tuldner と呼ぶ, 30Br., 30番目の死亡者, (1425~36年の作画)

短剣作りは武器の短剣（Dolch）と家庭用の片刃のナイフ（Hausmesser）を製作する職人である。図の中央，L型の鉄のブロックを頭部につけた支柱が金床の傍に立っている。これは今日のねぢ式万力が出現する以前の万力なのである。ナイフ作りはこの万力に刀身を固定して加工する。図では今ナイフの柄を固定して加工している。ナイフの柄には銀，銅，真鍮，錫，鹿の角，角，象牙，木などが用いられる。作業机の上や背後の戸棚には出来上った種々の形の短剣やナイフが見られる。

13. 数珠作り, Leupolt と呼ぶ, 31Br., 31番目の死亡者, (1425~36年の



Fig. 19. 短剣作り  
(Amb. 317.2°, Bd I, 12v)

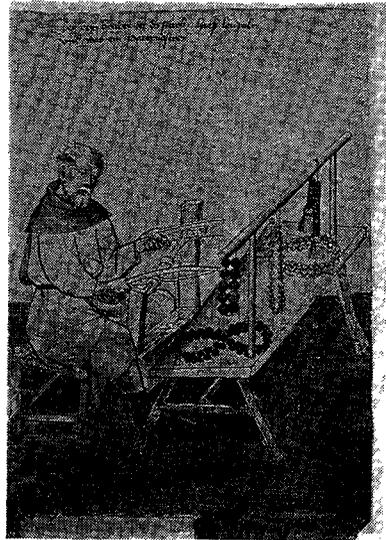


Fig. 20. 数珠作り  
(Amb. 317.2°, Bd I, 13)

作画)

数珠作りは作業台兼陳列台の前の背のない編み細工の腰掛けに座して、ロクロひきをしている。高級な木の板を弓ぎりの穿孔器で挽いて小珠を作るのである。穿孔器の心棒が左手の方に動いて、中央の錐の先端が板に穴をあけると、その間、中央の錐の両側の刃が半球を削り取る。

板の一方側をこのように加工し終ると、板を裏返して、同じことを繰り返すのである。この際先にあけられた中央の錐の穴を案内として加工が行われる。そして丸い小球が作られ、中央の錐からこの小球が取り去られるのである。弓ぎりはすでに新石器時代に使用されていた。今ここに見る弓ぎりの穿孔器の構造は正に旋盤と同一のものである。陳列台上には黒色の数珠、赤色の数珠があるが、その1つの黒色の数珠は管状のもので出来ていて房がついている。

13v. 尾錠作り, Andres と呼ぶ, 32Br., 32番目の死亡者, (1425~36年の作画)



Fig. 21. 尾錠作り  
(Amb. 317.2°, Bd I, 13v)

背のない腰掛けに座して、万力台上に締め金を載せ、しっかりとヤスリをかけている。尾錠には銅、真鍮、鉄が使用される。机上及び陳列窓には完成品が見られる。

14. 馬具製造人, Lienhard と呼ぶ, 33Br., 33番目の死亡者, (1425~36年の作画)

専用の金床の上で、締金のついている馬の腹帯に、鉄或いは真鍮のハトメを叩き込んでいる。馬具製造人は、腹帯や面懸<sup>おもがひ</sup>、<sup>あぶみ</sup>錠の皮の部分、馬用の諸道具を造る。

14v. 革紐製造人, 革紐屋の Hans と呼ぶ, 34Br., 34番目の死亡者, (1425~36年の作画)

作業台の上で1枚の皮を、<sup>はこ</sup>鞍型(半月形)の包丁で細い革紐に切断している。

15. 短剣作り, 刃物屋の Peter と呼ぶ, 35Br., 35番目の死亡者, (1425~36年の作画)

12v.と全く同様の図である。

15v. ランタンの窓作り, 角細工屋<sup>\*</sup>の Ffritz と呼ぶ, 36Br., 36番目の死亡者, (1425~1436年の作画)

\* Ffritz Hornrichter と記してある職人の名前の Hornrichter は、角を平らに仕上げる職人を示し本来は櫛製造人の事である。そこで角細工人 Ffritz とした。

職人はランタンの窓用の角の板を、作業台上の2本のほぞに当てて、適当な厚さにする為に削り落している。その傍の床上の容器には角の板が平らになるように、ぎゅっと押し込んであるのが見られる。

角の加工は、先づ角を水に浸すか或いは煮沸して柔らかにしてから行われるのである。そして角の薄板は図にあるような容器に入れ、くさびを押し込んで強く圧して平らにしてから削り落とす。角の板が彎曲したランタンの窓ガラスの代りに利用されているのである。

16. 製繩者, 繩屋の Lorencz と呼ぶ, 37Br., 37番目の死亡者, (1425~36

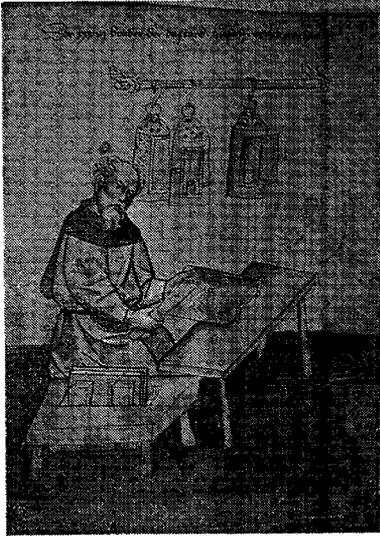


Fig. 22. ランタン窓作り  
(Amb. 3172°, Bd I, 15v)



Fig. 23. 製繩者  
(Amb. 317.2°, Bd I, 16)

年の作画)

打ち込まれている支柱に回転出来る木製の十字形の板が固定されている。この板は、先端が鉤になっている鉄の心棒と一体になっていて、支柱を直角に貫いている。十字板を助手の職人に回転させると、板も心棒も惰性で回転し続けるので、鉤の先にかませた繩はよられてゆく。製繩者はゆっくりと後退しながら腰に巻きつけている麻の糸をくり出して繩をなつてゆく。丁度紡錘車で糸を紡ぐのと同じ事である。床には麻の束と完成品の繩がおかれている。

16v. 市の使丁、走り使いの Dyetrich と呼ぶ、38Br., 38番目の死亡者、(1425~36年の作画)

養老院の服装の上に肩掛けをし、頸に帽子をかかけた姿である。左肩には槍がかつぎ、右手にニュルンベルク市の紋章の入った蓋のある瓶を持ち運んでいる。この瓶の中には手紙或いは書類が入っている。槍は強盗などから身を守るため



Fig. 24. 市の使丁  
(Amb. 317.2°, Bd I, 16v)

のものである。

17. 甲冑磨き工, 磨き屋 Bernhart と呼ぶ, 39Br., 39番目の死亡者, (1425~36年の作画)

ここでは帽子を磨いている。他は 7v. と同様である。

17v. 靴屋, 靴屋の Herman と呼ぶ, 40Br., 40番目の死亡者, (1425~36年の作画)

3本脚の椅子に座し, 膝の間にはさんだ靴の底をナイフで加工している。床上に1対の木の靴型と大きなバネつき鉞がある。

18. 仕立屋, 仕立屋 Lorencz と呼ぶ, 41Br., 41番目の死亡者, (1425~36年の作画)

縫い針をもってマントのえり周りを縫っている。壁には出来上った裏が毛皮の赤いマントと, 毛皮でふち飾りをした水色の胴着が吊されている。いずれも

高価なもので、誰れでもが着用出来るものではなかった。それは経済的理由の為めばかりではなかった。

“リスの毛皮を着て先頭をゆくのはどういう人ですかとたずねた。その答は、あれは騎士と法律博士と医者だ、ということであった。”<sup>(4)</sup>

市民内部の身分により着用し得る衣服を規制する衣服規制令が公布されていたからである。この規制は同時に市民達が華美で贅沢な生活に墮することをいましめるものでもあった。これに違反すると注文者も職人もともに罰せられた。コンラッド・メンデル一世もペーター・メンデル一世も1383年、余りにも華美な服装をしたかどで罰せられている。しかし14世紀の半にはフランスから新しいモードが入ってきて、忽ち贅沢な衣装が目立つようになった。

作業机の上には木製の物差しと大きなラシヤ鋏が置いてある。前出のバネ鋏み(17v.)は紀元前300年頃からもたらされたものであるが、ラシヤ鋏は後期



Fig. 25. 仕立屋  
(Amb. 317.2°, Bd I, 18)



Fig. 26. ロクロ師  
(Amb. 317.2°, Bd I, 18v)

ローマ時代に初めて出て来たものである。

18v. ロクロ師, ロクロ屋の Lienhard と呼ぶ, 42Br., 42番目の死亡者,  
(1425~36年の作画)

職人は足踏み駆動上下動式旋盤によって木を回転させ加工している。旋盤の台の上には種々な形の削り具(バイト)がある。弾力に富んだ木材が高い支柱の頂部に固定されている。木材の先端からのひもが旋盤の鉄の回転軸に巻きつけられており、そしてペダルに到っている。ペダルを踏むことにより生ずる木の弾力による上下動が、旋盤の加工物の回転運動をひき起すのである。

1240年のシャルトル大聖堂のステンドグラス及び14世紀のフランスの手写本の中に初期上下動式旋盤の図を見ることが出来る。

19. 釘製造人, 釘屋の Ott と呼ぶ, 44Br., 44番目の死亡者, (1425~36年の作画)



Fig. 27. 釘製造人  
(Amb. 317.2°, Bd I, 19)

箱の腰掛けに座した職人が、金床の上で赤熱した釘を叩いている。釘は既に大体成形してあり、穴のあいている鉄製釘形板（釘のダイス）にはめこんで叩き、きちんとした一定の形にするのである。同時に頭のふくらみをも成形する。金床には、叩くのに都合の良いように穴があけてある。作業机の上にはまだ粗造りのコブのついた釘が入った盆と、完成した釘の冷却用の盆とが置いてある。傍には完成品が見られる。背後の火床には、木組の柵の中に2ヶの大きな鞆を具えた送風器が見られる。その棒（リング）を手で上下に動かすと、一方の鞆が空気を吸い込んでいるとき他方は火床に息を吹き込み、連続的な空気の流れを発生させることが出来た。このような送風器の絵は1330年には見られている。

大体において手製の釘は粗雑であった。従って釘を真直に打ち込むことは難しかったので、最初に突き錐などで孔を準備しておくか、バランスのとれた出来の良い金槌を用いることが必要だった。従って良い金槌は非常に貴重な存在だった。

19v. 小商人、あきんどの Mertein と呼ぶ、43Br., 43番目の死亡者、(1425～36年の作画)

街頭の小商人が手にますを持って、物売り台の後に立っている。台の上には大きな平たい手さげ籠と、穀粒の入った種々の容器がある。

20. 鳥配び屋、Stayn の Resch と呼ぶ、45Br., 45番目の死亡者、(1425～36年の作画)

背負い皮と支え棒のある背負い籠を負っている。両手で支え棒を押へ、バランスをとっている。背負い籠の中には鳥が入れてあるが、時には農産物を入れて運ぶこともある。籠の上部は南京錠が締められている。亦籠の下部では鳥共が頭をつき出している。

20v. ビール作り、ビール屋の Herttel と呼ぶ、46Br., 46番目の死亡者、(1425～36年の作画)

ビール醸造職人が、環のついてる大きくて重たい醸造用平鍋を長い棒でかき

混ぜている。煉瓦で築いた円形の炉にかけて、強火の許で、調整したホップをかき混ぜながら入れてゆくと甘味のあるビール液になってゆく。平鍋は銅製或いは錫メッキした鉄で作られている。職人の前の方には上部が細くなっている木の桶が2ヶ置かれている。亦うしろには魔よけでもある星形の看板を吊り下げた広告柱がある。ビールの小売を知らせるこのような看板には、この星形の外に長四角の格子形のものもある。

21. 指物師、家具屋の Karl と呼ぶ、47Br., 47番目の死亡者、(1425~36年の作画)

指物師は作業台の側から、木のくさび釘で固定されている板を仕上げカンナで削っている。鉋の前面には突起した握り柄がついている。木のくさび釘は仕事台に叩き込めるようになっていて、使用の都度叩き出して使用するのである。この当事にはまだ加工物を固定するカンナ台は知られていなかった。鉋は恐ら



Fig. 28. ビール作り  
(Amb. 317.2°, Bd I, 20v)



Fig. 29. 指物師  
(Amb. 317.2°, Bd I, 21)

く紀元前4～5世紀頃ギリシヤ人によって発明されたものであろう。台の上には、のみとハンマーが、そして壁にはおさ鋸が掛けてある。張りを調整する装置のついているおさ鋸は中世になって考案されたらしい。この刃は張り枠の面からよじることが出来るので、厚板を長軸にそって切ることが出来る。初期のおさ鋸の絵は12世紀のモンレアレ大聖堂のモザイク及び13世紀のシャルトル大聖堂のステンドグラスに見られる。仕事台の前には飾り金具のついた長持ちと、むき出しの小さい木箱がある。両方とも3葉形の飾りのある台座がついている。

21v. ブドー酒店主, Nüssel と呼ぶ, 48Br., 48番目の死亡者, (1425～36年の作画)

角材の上に据えつけられた酒樽の前の低い腰掛けに座して、亭主が樽の口をあけている。青銅製のコックから木製のジョッキに注いでいる。コックの下の方には、あふれた酒を受けて溜めておく楕円形の桶が置いてある。木製のジョ



Fig. 30. ブドー酒店主  
(Amb. 317.2°, Bd I, 21v)

ッキは規格の大きさの器で、マスである。これで取り分けたブドー酒の正確な量が計られ、傍らのじょうごのある錫製の瓶に入れられる。

枝束の飾りと、赤-白-赤の帯に塗り分けた盾型紋章の旗のある棒が直角に差し出されている。枝束の飾りは、ワインを提供しますという印しで、ワイン酒場の看板である。

**22.** 袋物・財布作り, Herman と呼ぶ, 49Br., 49番目の死亡者, (1425~36年の作画)

財布作りは作業台の前に座して、革の財布を手に行っている。財布の底部に房のあるもの、引き紐のあるもの、貝殻の飾りをつけた旅行用の財布など種々ある。

**22v.** 農夫, Staud と呼ぶ, 50Br., 50番目の死亡者, (1425~36年の作画)

肩に鉄の刃のある木製スコップをかつぎ、右手には伐裁用の手斧を持っている。

**23.** 靴屋, Tumherr と呼ぶ, 51Br., 51番目の死亡者, (1425~36年の作画)

靴屋は出来上がった品々を示している。低い机の上には1組の編み上げ靴、壁の棹には締め紐と留め金のついた靴と、股まである長い漁師用の長靴がある。

**23v.** 漁師, 魚屋 Heintz と呼ぶ, 52Br., 52番目の死亡者, (1425~36年の作画)

フォーク状の手網をかつぎ、皮ひもでつないだ2ケの小樽を右肩にかけている。この小樽は、採った魚を生きたまま運ぶためのもので、水が一杯入っている。

**24.** 鐘楼守, 塔守りの Berchtold と呼ぶ, 53Br., 53番目の死亡者, (1425~36年の作画)

はざま胸壁(ギザギザの壁)を備えた塔からラッパを吹いている。

**24v.** 屋根葺き職人, 屋根屋の Ffritz と呼ぶ, 54Br., 54番目の死亡者, (1425~36年の作画)

家の壁にもたせかけたはしごの上で、屋根の中央部に瓦を挿しはさんでいる。

はしごの段にはモルタル入りのバケツがこてと一緒に吊してある。地面には2束の煉瓦が置いてある。

都市には火災防止のための建築規則があり、14世紀以後にはワラ屋根、板ぶき屋根は禁止された。瓦として普通タイルが用いられたが劈開性の石ならなんでもよかった。特にジュラ紀の岩石である剝性石灰石の使用が大変に普及した。鉛板も屢々用いられた。

**25.** 桶屋、桶屋の Albrecht と呼ぶ、55Br., 55番目の死亡者、(1425~36年の作画)

作業台にまたがって、逆さに置いた柄付き手桶のたがを叩き込んでいる。床の上には、大きな柄付手桶、握り工合の良さそうなひしゃく、蓋のある木製のジョッキがある。

**25v.** 錠前作り、錠前屋の Albrecht と呼ぶ、56Br., 56番目の死亡者、(1425~36年の作画)

金床の上の南京錠をハンマーで叩いている。仕事部屋の間じきり用の枠は、一辺が弓形の三角小間のある様式になっている。**26**図の圧痕が転写されている。

**26.** 薪割り、薪屋の Ulrich と呼ぶ、57Br., 57番目の死亡者、(1425~36年の作画)

丸太を枕にした薪を、幅広の斧で割っている。地面には2ケの鉄のくさびと長い柄の木槌が置かれているが、これも薪割り道具である。

**26v.** 車大工、車屋 Thoman と呼ぶ、58Br., 58番目の死亡者、(1425~36年の作画)

**10v.** 図と同様である。

**27.** 革帯作り、ベルト屋の Seytz と呼ぶ、59Br., 59番目の死亡者、(1425~36年の作画)

重々しく垂れ下った僧帽を被った職人が、小穴のある特殊な金床で、革帯に鋳を打ちつけている。鋳は真鍮亦は鉄の薄板製である。職人が右手に持ってい

るのは金属製の鋸であろう。革帯作り達は亦印刻した装飾金具も作るが、仲々にすばらしい腕前を持ち賞讃のまとなるほどであった。

27. 荷馬車の馭者, 馬方の Leupolt と呼ぶ, 60Br., 60番目の死亡者, (1425~36年の作画)

農業用二輪車には, しなやかな柳の枝で編んだ籠をつけるか, 或いは車の棒枠の間を枝編みで張るのが普通だった。この種の二輪車は約 500kg の荷を運ぶ事が出来る。この図の馬が付けているような近代的な牽引具は12世紀以後ヨーロッパで普通になったものである。かじ棒を支えている革帯には, かじ棒の重量が加わるが, これは鞍によって馬の背中に分散されるので馬に擦り傷をつくるのを防ぐことが出来る。

28. 紡糸用糸巻き棒作り, Francz と呼ぶ, 61Br., 61番目の死亡者, (1425

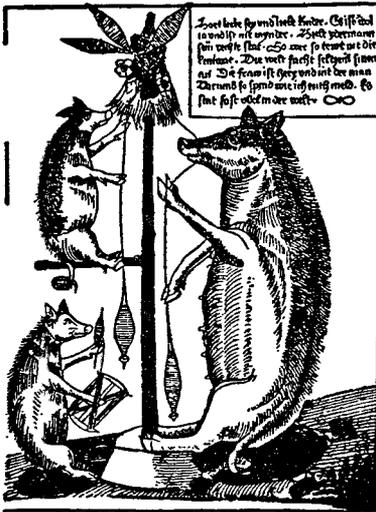


FIGURE 173—The cross-reel (lower left); spinning from a fixed distaff (centre). A Nuremberg symbolic woodcut of c 1490.

Fig. 31. 図の中央部, 紡糸用糸巻き棒あり (使用法の図)



Fig. 32. 紡糸用糸巻き棒作り (Amb, 317.2°, Bd I, 28)

～36年の作画)

青々とした中庭で手斧を手にして糸巻き棒を削っている。彫刻のある十字形の脚部をもった糸巻き棒の完成品と、薄板を組んで作った四角いバスケットが置かれている。

28v. 梳毛工, 毛梳き屋の Cunrad と呼ぶ, 62Br., 62番目の死亡者, (1425～36年の作画)

よりかかりのある編んだ椅子に掛けた職人が台に固定してある梳き櫛から、梳いた羊毛のかせを第2の櫛で引き抜いている。職人の前には火鉢が置かれ梳き櫛を熱している。

これは原糸を紡いで糸にする前に、かたまりやもつれを除いて均質なものにする工程である。

先づ原糸を棒で叩きながら、ごみを取り除き、品質・産地などに従って分類する。次いで熱湯・水で洗毛、乾燥、再び異物を除き、からんでる毛を切り、水を打ちながら打毛し、繊維を解きほごす。全体にオリーブ油をしみ込ませてから櫛状の器具で毛を梳くのである。歯の通りをよくするために櫛を熱する。少々の羊毛を櫛にのせ、他の櫛の歯でそっと引っかけて梳く。この操作は羊毛がすべて自由に櫛を通すようになるまで続けられる。これにより繊維はばらばらになり、もつれた毛は解きほごされ一様にされる。遂に一束の長い平行になった繊維だけが取り出され、紡ぎ用糸巻き棒にとりつけられる。そしてこれは経糸用に紡がれる。短い繊維は櫛の歯に付着したままで残るのでブラシ状のもので繊維の方向をそろえてから、緯糸用に使用されるのである。<sup>(5)</sup>

古代に於ては梳毛糸は知られていなかった。梳毛糸はペダル式織機が発明され、より長い経糸が必要となった13世紀以後にヨーロッパに現れてきたのである。

29. 環製作工, リング屋の Lienhard と呼ぶ, 63Br., 63番目の死亡者, (1425～36年の作画)



Fig. 33. 梳毛工  
(Amb. 317.2°, Bd I, 28v)



Fig. 34. 環製作工  
(Amb. 317.2°, Bd I, 29)

大きな弓の弦にぶら下げてある鉄の環を、職人が両手で左右に振りながら磨き台のくぼみに擦り付けてびかびかに磨いている。弓の柄は木製で弦は鉄線である。磨き台は木の切り株を用いており、くぼみには草が打ちつけてある。

29v. 錫器製造助手, Sebolt と呼ぶ, 64Br., 64番目の死亡者, (1425~36年の作画), 錫器製造職人の助手で, 錫器成形用旋盤の回転係である。

助手が錫容器がセットされている旋盤を回転している。ここで親方職人の手で容器は望み通りの対称的なふくらみをもった形に切削される。形が作られてから、底部と取手がハンダ付されて完成する。

30. 魚小売商人, 小あきんどの Andres と呼ぶ, 65Br., 65番目の死亡者, (1425~36年の作画)

小売人は背あてのある椅子に座して売っている。屋台の表面は格子造りで、横わきには2段の吊し台がある。魚は一部は吊し, 他は2ケの舟形の平桶に入

れてある。

30v. 佐官屋、佐官屋の Fritz と呼ぶ、66Br., 66番目の死亡者、(1425～36年の作画)

瓦屋根、切妻壁の赤煉瓦で出来ている家の壁を、真新しいピカピカしているコテで塗り上げている。左手の柄のついてる丸い台にはしっくいがかかっている。地面にはこねくわが入っているしっくい箱がある。

注(1) 中世初期になると靴は商業的に重要なものになり、製革工の中から製靴工が専門化した。

靴にかかとをつけるようになったのは16世紀後半からである。

(2) 大部分の型板は、計画された一定のもので、ギルドの所有物だった。

(3) おこなべな (ラシヤかきぐさ)、まつむしそう科、ヨーロッパ原産の2年草、茎は1.5～2mの高さになる。7～9月に淡紫色の約10cm位のやや円筒形の頭状花をつける。乾燥すると硬くなりラシヤの毛をおこすのに用いる。(牧野植物図鑑から)

(4) ルネサンス巷談集、第33話、165頁、岩波文庫。フランコ・サケッテイ著、杉浦明平訳。

(5) 技術の歴史 (筑摩書房)、第3巻、155頁。

ヨーロッパ中世の民衆と蜂起、土井正興編、三省堂、89頁。